

甲斐風土記の丘(曾根丘陵公園)の古墳

山梨県立考古博物館構内古墳(甲府市)

正面が甲斐風土記の丘への入口で入って左手に山梨県立考古博物館がある



この背後の山に大丸山古墳があるらしい



これが山梨県立考古博物館



手前に「超光円通尊」の石碑が立っている



「超光円通尊」石碑解説

(表面) 超光円通尊

(裏面) 松木氏者累代旧家古時為国金極印所也
世々居于柳駅第一尊崇馬頭観音大士安置
於宅地中今茲主人松木春政厚勤家業山寿
海樽益信仰此尊又新立石永世受福無疆矣
文久三年歳次癸亥五月 金齋良鼎謹書



(訳文) 松木氏は累代の旧家で、昔は甲州金の極印所を勤めていた。
代々柳町に住み、宅地内に馬頭観音を安置して第一に崇敬していた。
今の当主の松木春政も家業に励み盛業中で、ますますこの観音を信仰しているが、ま
た別に新たにこの石碑を立てて祀ったので、きわまり無く福運を受けることであろう。
文久3年(1863)歳次(としまわり)癸亥(みずのと・い:干支の60番目最後の年)
5月 金齋良鼎が謹んで書く

(解説)

松木家は、山下・野中・志村とともに甲州金座を構成する名家で、一説には天文年間(1532~55)から武田氏に仕えて府中柳町に居住したとされます。甲州金座の成立は天正年間からとされますが、慶長14年(1610)に松木五郎兵衛が徳川家康より金貨製造の独占権を特許され、以降甲州金に「松木」の極印のみが許されることになりました。甲州金は甲斐国内でのみで通用した地域貨幣で、明治4年に廃止されるまで使用されていましたが、甲州金の製造自体は享保17年(1732)まででした。江戸時代中頃に金貨製造から離れた後、松木家がどのような運命をたどったかは定かではありません。しかしこの碑文により、松木家は文久年間に、甲州街道の宿駅である柳町(甲府市)に居を構え、松木春政が家系を継いでいたことが分かります。

さらに、宅地内に馬頭観音を安置して信仰していたとありますが、馬頭観音は六観音、八大明王のひとつで、馬頭をいただく忿怒(ふんぬ)相をもち、単独で造像され信仰されることは希であったといえます。江戸時代に入り、馬の守護神として信仰されるようになり、馬頭観音像が路傍に立てられるようになりました。おそらく当時の松木家が、運送に関する事業を展開していたことから、馬頭観音を信仰していた可能性が考えられます。

この石碑が建立された文久3年は、干支の最後の年にあたり、また幕末の不安定な世相に対し、良い運気を高め、家の行く末の安泰のため、金齋良鼎なる人物に名家にふさわしい神を新設して信仰すべきことを勧められたものと推察されます。

この石碑は、ながらく協和銀行(現りそな銀行:甲府市丸の内2丁目)の駐車場に立てられていましたが、昭和55年12月に県立図書館に移転されました。平成24年11月の新県立図書館開館に伴い、石造物が考古資料として研究されていることから、当館に移転することとなり、平成24年12月27日に当館ピロティに設置しました。

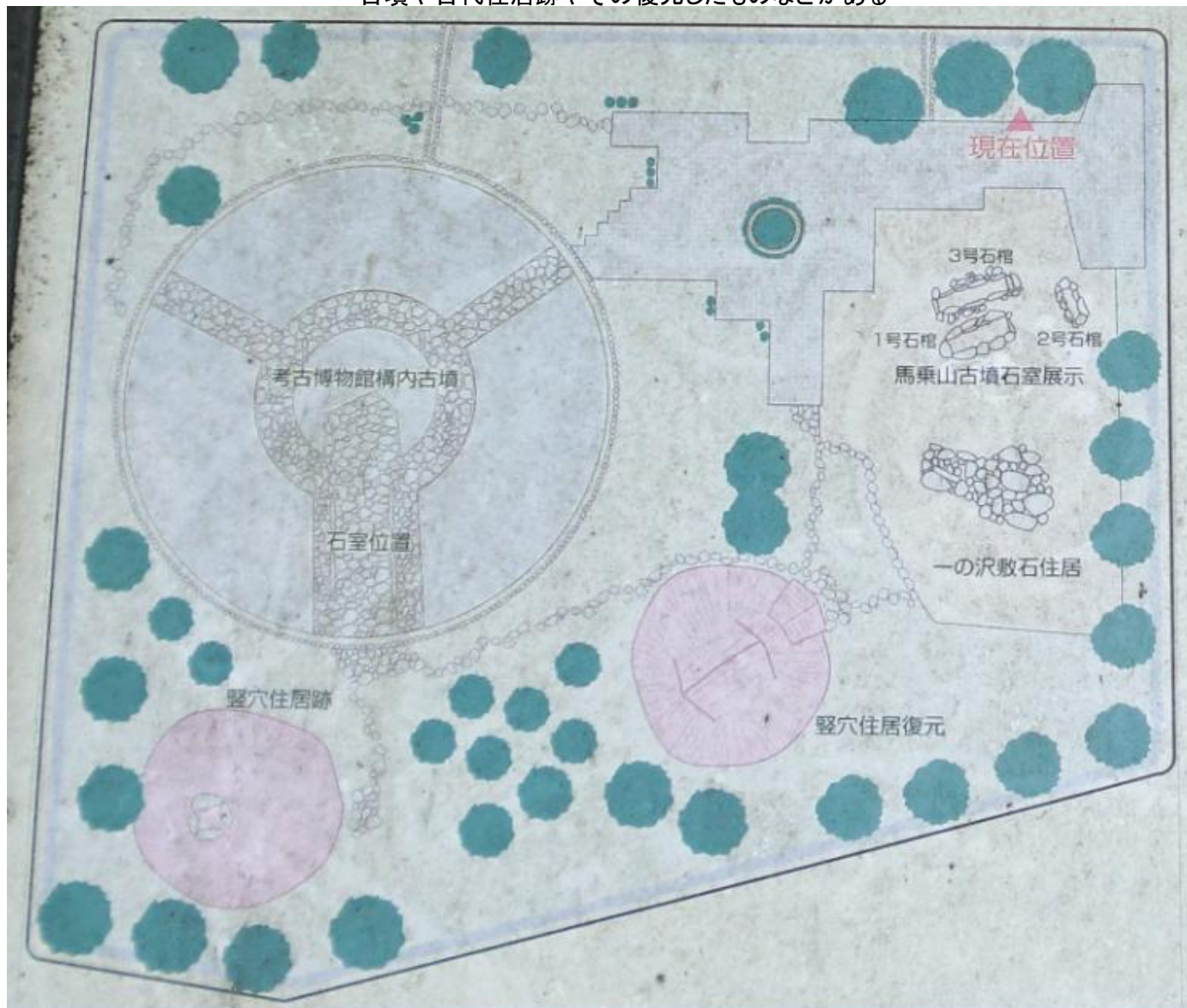
なお、この資料チラシはエントランスホールに備えてありますので、自由にお持ちください。



さて、ここが山梨県立考古博物館の脇にある構内古墳のある広場



古墳や古代住居跡やその復元したものなどがある



ここは縄文時代の住居や古墳を利用して整備した、古代広場です。

実際の古墳や縄文時代の住居にふれることができる、屋外博物館とも言えるコーナーです。

広場に入ってすぐ左手には古墳の石棺せつかんがあります。これは東八代郡境川村やおとめの八乙女古墳うまのりやま（馬乗山1号墳）の石棺で、中央自動車道境川パーキングエリアの建設にともなって発掘されたものを、ここに移築しました。この古墳は直径13メートルの円墳で、墳丘の上部から死者を埋葬するための組合せ式石棺が4基も発見されました。出土した直刀ちやくとうや鉄鎌てつそくなどから、5世紀中頃につくられたことがわかっています。この広場には、損傷が激しい一つを除いた3基の石棺を、発見された時と同じ位置関係に再現してあります。

次にその南側には、敷石住居跡しきいしじゅうきょあとが移築されています。これは東八代郡境川村いちのさわ一の沢遺跡から発見されたもので、今からおよそ3800年程前の縄文時代後期の住居跡です。床に石を敷き詰めてあることから敷石住居と呼んでいます。住居の入り口部分が張り出しており、ここにも石が敷かれています。縄文時代には竪穴住居たてあなじゅうきょが一般的ですが、中期の終わり頃

から後期前半の東日本地域では、このような敷石住居もさかんにつくられています。

広場の南端にたっている茅葺きの住居は、縄文時代中頃の竪穴住居を復元したものです。地表から数10センチ掘り下げ、草や編み物を敷き床としたもので、さらに柱を立てて屋根をのせてあります。このようなすまいを竪穴住居と呼びますが、こうした作り方は縄文時代以降も続いており、平安時代頃までみられます。この復元住居は中巨摩郡敷島町かねのお金の尾遺跡13号住居をモデルとしています。

広場中央やや西寄りには古墳があります。破損がひどく石室の一部が残っていただけですが、今は植え込みと敷石とで表現してあります。これは当初からここに位置していたもので、発掘により6世紀後半につくられた直径15メートルほどの円墳であることが確認されました。石室内部からは直刀や甲冑かつちゅうなどの武器や馬具類、金環きんかん、勾玉まかたま、管玉くだたまといった装身具類などが見つかっています。

これは考古博物館構内古墳/正面中央は石室の位置を示す/奥壁の様子も見てとれる



植え込みと敷石とで表現されている6世紀後半の円墳



竪穴住居跡(炉の跡が表されているようだ)から見た考古博物館構内古墳

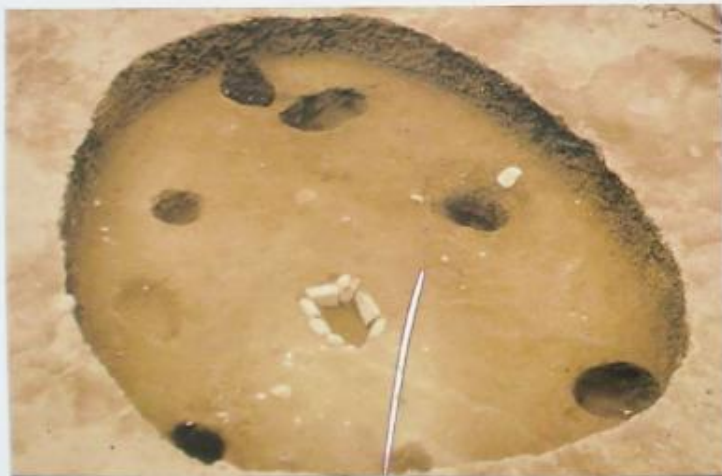


縄文時代中頃の竪穴式住居(復元)





復元住居(金の尾遺跡13号住居跡)土器出土状態



復元住居(金の尾遺跡13号住居跡)完掘状態

じょうもんじ だいにくげん じゅうきょ
縄文時代復元住居
(縄文時代中期)

この復元住居は、縄文時代の代表的な住居を再現したものです。地面を円形に数10cm掘り下げて土間とし、そこに柱をたて、円錐形の屋根をのせた半地下式の家を竪穴住居と呼んでいます。

これまで県内各地から発掘調査によって竪穴住居跡が多く発見されていますが、この復元住居は、1978年に中央自動車道建設にともなって調査された甲斐市大下条の金の尾遺跡13号住居跡をモデルに復元されています。

金の尾遺跡13号住居跡は、今から約5000年前の縄文時代中期のもので、長径4.55m、短径3.65mの長円形をしています。50cmほど掘りこんでつくられた土間の壁に沿って、20~50cmの深さの8つの柱穴がみとめられました。柱穴の配置からみて、南側が入り口にあたり、また住居内のやや奥まったところに、長方形の石囲いの炉が設けられていました。

この竪穴住居は、発掘された住居跡をそのままにつくり、その柱穴に丸太の柱をたて、梁をわたして垂木をたてかけたものに、カヤを葺いて上屋を復元したものです。床には、草や板、編み物などが敷かれていたでしょう。半地下式の竪穴住居は、湿度が高く、窓もないために生活しにくかったとも思われますが、夏涼しく、冬暖かいという良い点もあるようです。

縄文時代の人々は、日当たりのよい小高い場所をえらび、5、6軒から10数軒の竪穴住居をつくって集落を構成していたと思われます。1軒には4~5人の家族が住んで、私たちが想像するより豊かな自然の中で、狩りや漁、木の実の採集などによって暮らしていたと思われます。

これは縄文時代後期の敷石住居跡





敷石住居跡(一の沢西遺跡)



敷石住居跡(石囲炉)

敷石住居跡

(縄文時代後期)

縄文時代の住居形態の1つに敷石住居があります。これは、住居の床面に平らな石を敷きならべたもので、当時の住居として一般的であった竪穴住居に比べ、特異な存在です。敷石住居跡がみられるのは、東京・神奈川などを中心に東北地方南部から中部地方の地域で、時期的にも縄文時代中期の終わりから後期の初めごろにつくられます。県内でもこうした敷石住居跡はたくさん知られています。

ここにある敷石住居跡は、考古博物館より約4km東方の、笛吹市境川町一の沢西遺跡で発掘されたもので、縄文時代後期初め頃、約4500年前のもので、1983年に農業水利事業の工事にともなって県教育委員会が発掘調査し、縄文時代中期の竪穴住居群に混じって1軒だけ発見されました。当時のようすがよく残っている貴重な資料であったため、ここに移築保存されました。

この敷石住居跡は、1辺が約1.8mの六角形をした居住部から、北西側に幅1.8m、長さ1.4mの入口部がついた柄鏡形をしています。敷石の用材は石英閃緑岩の板石で、最も大きなものは90×50cmほどもあります。居住部のほぼ中央には、4枚の平石で組んだ炉が見られ、炉の内部には土器片が敷かれていました。地中に掘り込まれた竪穴住居に対し、掘り込みの見られない平地住居で、柱穴はみとめられず、出土した遺物も小さな土器片が中心で、その数もあまり多くありませんでした。

ところで、このように冷たくかたい敷石の上で生活するのは、快適なものとはとても言えないでしょう。そのため、敷石住居については、通常の生活の場としてよりは、何か特別な意味をもった祭りの施設ではないかと考えられています。

これは5世紀中頃の早乙女古墳(馬乗山1号墳)の石室/移築再現/右手は手前が3号石棺、奥が1号石棺、左手が2号石棺



手前が3号石棺、奥が1号石棺



4号石棺は破損が激しく復元されていない



八乙女古墳(別称:馬乗山1号墳)



八乙女古墳(別称:馬乗山1号墳)石棺

八乙女古墳石棺

〔別称:馬乗山1号墳〕

この3基の石棺は、死者を埋葬した墓室です。古墳は考古博物館より東北東約2.2kmの、笛吹市境川町藤垜字八乙女にありましたが、中央自動車道境川パーキングエリア建設のために1980年に県教育委員会が発掘調査を行って、直径13mの円墳(1号墳)と全長60mの前方後円墳(2号墳)の2基の古墳を発見しました。

2基の古墳は、曾根丘陵上の一部である、通称八乙女山と呼ばれている台地の北端、標高300m付近につくられていましたが、工事により削られたため、1号墳の石棺は公園整備とあわせて野外展示の教材として、1987年にこの地に移築されたものです。

1号墳は周囲に幅1mほどの溝をめぐる円墳で、墳丘上には死者を埋葬する組合せ式石棺が4基つくられていました。このうち破損のはげしい4号棺を除いて、そのままの位置関係で復元されています。1号棺は長さ1.86m、幅0.5m、高さ0.43m程の大きさで、古墳のほぼ中央に位置していることから、最初に亡くなった人の埋葬施設と考えられています。1号棺から剣・直刀・鉄鏃・刀子などが出土していますが、副葬品の年代から、5世紀中頃につくられた古墳と考えられています。

この時代は、風土記の丘・曾根丘陵公園内の銚子塚古墳や大丸山古墳といった大形古墳を築造した甲斐の古代豪族の勢力が、次第に分散して周辺に広まり、笛吹市境川町・八代町や南アルプス市の市之瀬台地などにも古墳が盛んにつくられる時代です。本古墳も、地域の有力豪族の墓と考えられています。

参考ホームページ

http://sgkohun.world.coocan.jp/archive/index.php/kohu_kouko/

至 精進湖

甲斐風土記の丘・曾根丘陵公園



道路標識あり

国道 358 号

P

上の平方形向洋墓広場

芝生広場

テニスコート

野外ステージ

遊具広場

バーベキュー場

甲府市役所 中道支所

トイレ

勾玉広場

風土記の丘研修センター

P

P

トイレ

稲荷塚古墳

東山南遺跡



